

第1章 歴史的・地理的環境

第1節 遺跡の位置と周辺遺跡

鹿田遺跡は、岡山市街地の南部に位置する岡山大学鹿田地区（岡山市北区鹿田町2丁目5番1号）のほぼ全域にわたって広がる縄文時代～近世の複合遺跡である。その位置は、岡山県中央部を走る旭川が形成した岡山平野の南端部にあたり、河口近くに形成された三角州帯上に立地している。現在の旭川は、本遺跡の東方約1kmを児島湾に向けて南流しているが、かつては岡山市街地の北東から南西にかけて幾筋かの河道となって網流していたと考えられる。現在、鹿田遺跡は海岸線から北に約7.5km程度の距離を有するが、中世以前には、遺跡の南側近くに海の影響が強く及んでいたことが想定される。

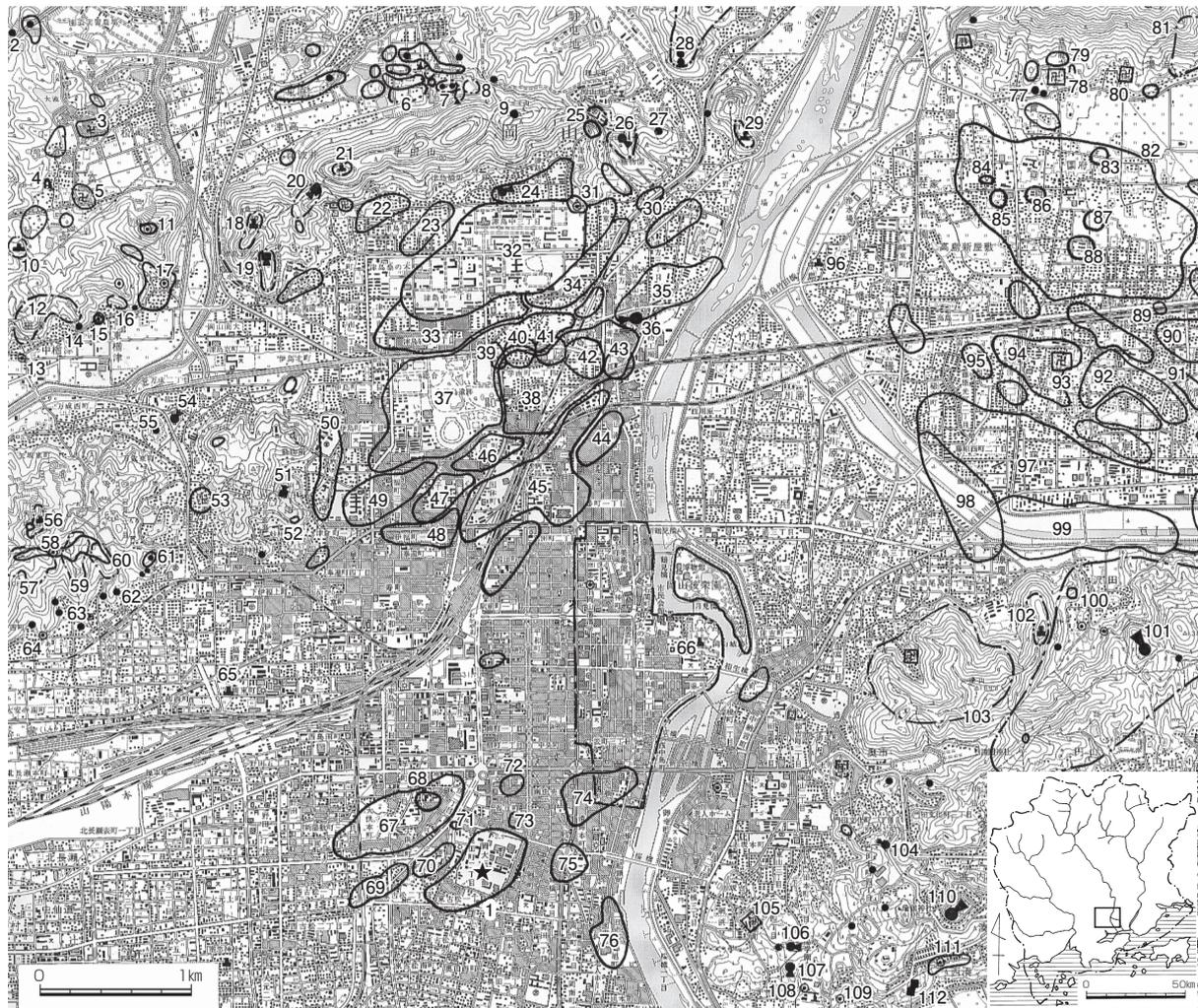
遺跡周辺における人間の生活は旧石器時代にまでさかのぼり、旭川を挟んで対岸の操山山塊ではナイフ形石器が採集されている⁽¹⁾。縄文時代では、本遺跡が所在する平野部北端を区切る半田山丘陵南端に位置する朝寝鼻貝塚で前期の生活痕跡が確認されている⁽²⁾。こうした人間活動が本格化するのには縄文時代後期前葉以降である。明確な遺構を伴う代表的な遺跡をあげると、後期前葉～同中葉の堅穴住居や貯蔵穴群などが残る津島岡大遺跡⁽³⁾、旭川を挟んで後期中葉の貯蔵穴群などが調査された百間川沢田遺跡⁽⁴⁾があげられる。いずれも丘陵付近に限定された地域であるが、これらの集落は、一時的な中断を挟みながらも、弥生時代前期に向けて継続する。

弥生時代前期では、津島岡大遺跡⁽⁵⁾・津島遺跡⁽⁶⁾・北方遺跡群⁽⁷⁾や百間川沢田遺跡・原尾島遺跡⁽⁸⁾において水田遺構が調査されている。弥生時代早期とされる津島江道遺跡⁽⁹⁾の水田時期についての評価は確定していないが、水稲農耕の情報が岡山平野地域にかなり早い段階でもたらされ、受容されていたことは確実であろう⁽¹⁰⁾。

集落では、前期前半は津島遺跡に限定的であるが、その後、南方遺跡⁽¹¹⁾・雄町遺跡⁽¹²⁾・百間川沢田遺跡・同原尾島遺跡⁽¹³⁾などが出現する。さらに数が増加していくのは中期以降である。中期～後期の沖積作用の進行に伴う微高地形成と連動するように新たな集落が展開する。その結果、旭川西岸域における遺跡の分布は、半田山と京山丘陵のもとに広がる北群と臨海性の高い南群に二分される。前者では、前期末葉～中期前葉の代表的集落である南方遺跡から絵図遺跡⁽¹⁴⁾そして上伊福九坪遺跡⁽¹⁵⁾へと集落域は拡大的に中心地を移動し、後期には津島遺跡や伊福定国前遺跡⁽¹⁶⁾などを含めた広がりの中核的集落が形成される。後者では、中期後葉に鹿田遺跡⁽¹⁷⁾そして後期には天瀬遺跡⁽¹⁸⁾が加わり、遺跡群のまとまりをみることができる。旭川東岸では、雄町遺跡などのように前期から継続的に後期に至る遺跡が多い特徴が指摘されるが、その平野の南端に位置する百間川遺跡群では、中期に同兼基・今谷遺跡⁽¹⁹⁾、後期に同原尾島遺跡へと中心が移動する。

旭川下流域における墳墓は、弥生時代末～古墳時代前期には、平野部周囲の丘陵あるいは山塊上に弥生墳丘墓や前方後円（方）墳が数多く築かれ、複数の首長系列の存在を示唆する。鹿田遺跡が立地する旭川河口付近の古墳時代の首長系列としては、遺跡を見下ろす操山山塊の尾根上に位置する操山109号墳・網浜茶臼山古墳⁽²⁰⁾の系列を当てることができる⁽²¹⁾。造墓活動は古墳時代前期後半頃に最盛期を迎え、神宮寺山古墳⁽²²⁾、金蔵山古墳⁽²³⁾、湊茶臼山古墳⁽²⁴⁾という全長150m級の前方後円墳を生み出す。それらを最後に、前方後円墳の築造は急速に衰退するが、古墳時代後期に入ると周囲の山塊に中小の横穴式石室墳が群集して築かれるようになる。

古墳時代前期の集落は、百間川遺跡群や津島遺跡一帯に認められるように、弥生時代後期からの状況が、遺跡・遺構数の増加傾向を伴いつつ踏襲される。しかし、中期以降には規模の縮小傾向が一部の地域で指摘される。特に、旭川西岸では前述の南群に顕著に認められ、海側に近い鹿田遺跡周辺では遺跡は消滅する。旭川東岸の百間川遺跡群周辺でもそうした傾向が認められる。鹿田遺跡のように古墳時代前期まで安定した生活拠点であった集落の衰退には、古墳にみる首長系列の消長と軌を一にする状況をみてとれる。



- | | | | |
|---------------------------|----------------------------|------------------------------|---------------------------|
| 1. 鹿田遺跡 (縄文～近世) | 31. 朝寝鼻貝塚 (縄文前～後期) | 60. 正野田古墳群 (古墳後期) | 88. 中井・南三反田遺跡・古墳群 (弥生～室町) |
| 2. 富原西奥古墳 (古墳) | 32. 津島岡大遺跡 (縄文中期～近世) | 61. 関西高校裏山古墳群 | 89. 雄町遺跡 (弥生～古墳) |
| 3. 荒神廃寺 (飛鳥～平安) | 33. 津島新野遺跡 (弥生) | 62. 若宮古墳 (古墳後期) | 90. 乙多見遺跡 (弥生) |
| 4. 上の段窯跡 (奈良) | 34. 津島江道遺跡 (縄文～近世) | 63. 乞食古墳 (古墳後期) | 91. 関遺跡 (弥生) |
| 5. 矢望城廃寺 (奈良) | 35. 北方長田遺跡 (弥生～近世) | 64. 貝塚 (不明) | 92. 赤田東遺跡・関遺跡 (弥生～室町) |
| 6. 佐良池古墳群 (古墳後期) | 36. 神宮寺山古墳 (古墳前期) | 65. 高柳城跡 (室町?) | 93. 幡多廃寺 (飛鳥～平安) |
| 7. 播鉢池古墳群 (古墳後期) | 37. 津島遺跡 (弥生～近世) | 66. 岡山城跡 (室町～近世) | 94. 赤田西遺跡 (弥生～室町) |
| 8. 奥池古墳群 (古墳後期) | 38. 北方上沼遺跡他 (弥生～近世) | 67. 大供本町遺跡 (古代～近世) | 95. 原尾島遺跡 (弥生～室町) |
| 9. ダイミ山古墳 (古墳中期?) | 39. 北方下沼遺跡 (弥生～室町) | 68. 大供東浦遺跡 (弥生～室町?) | 96. 中島城跡 (室町) |
| 10. 蜂矢城 (室町) | 40. 北方横田遺跡 (弥生～室町) | 69. 鹿田本町遺跡 (板称) | 97. 百間川遺跡群 (縄文～近世) |
| 11. 坊主山遺跡 (古墳～室町) | 41. 北方中溝遺跡 (弥生～室町) | 70. 鹿田遺跡 (県立岡山病院) 遺跡 (平安～鎌倉) | 98. 百間川原尾島遺跡 (縄文中期末～近世) |
| 12. 中橋津古墳群 (古墳後期) | 42. 北方地藏遺跡 (弥生～近世) | 71. 散布地 (旧名: 大供遺跡) (弥生) | 99. 百間川沢田遺跡 (縄文中期～近世) |
| 13. 貝塚 (不明) | 43. 北方藪ノ内遺跡 (弥生～近世) | 72. 大供中道遺跡 (弥生～室町) | 100. 操山219号遺跡 (旧石器) |
| 14. 若宮八幡裏古墳 (古墳) | 44. 広瀬遺跡 (弥生) | 73. 散布地 (弥生他) | 101. 金蔵山古墳 (古墳前期) |
| 15. 東橋津貝塚 (不明) | 45. 南方遺跡他 (弥生～近世) | 74. 天瀬遺跡 (弥生～近世) | 102. 妙禪寺城跡 (戦国) |
| 16. 東橋津1号・2号墳 (古墳後期) | 46. 絵図遺跡 (弥生～平安) | 75. 新道遺跡 (奈良～近世) | 103. 操山古墳群 (古墳後期) |
| 17. 首部 (白山神社) 首塚 (鎌倉～室町?) | 47. 上伊福遺跡 (弥生・古墳) | 76. 二日市遺跡 (弥生～近世) | 104. 操山103号墳 (古墳前期) |
| 18. 鳥山城 (笹ヶ追城) 跡 (室町) | 48. 上伊福遺跡・伊福定国前遺跡 (弥生～近世) | 77. 唐人塚古墳 (古墳後期) | 105. 網浜廃寺 (飛鳥～平安) |
| 19. 七つ塚墳墓・古墳群 (弥生～古墳) | 49. 上伊福西遺跡・尾針神社南遺跡 (弥生～平安) | 78. 賞田廃寺 (飛鳥～室町) | 106. 網浜茶臼山古墳 (古墳前期) |
| 20. 都月坂墳墓・古墳群 (弥生～古墳) | 50. 上伊福西遺跡・尾針神社南遺跡 (弥生～平安) | 79. 賞田廃寺窯跡 (奈良) | 107. 操山109号墳 (古墳前期) |
| 21. 半田山城 (戦国) | 51. 津倉古墳 (古墳前期) | 80. 浄土寺 (奈良～室町) | 108. 操山202号遺跡 (平安～奈良) |
| 22. 津島福居遺跡 (古墳～室町) | 52. 妙林寺遺跡 (弥生) | 81. 湯迫古墳群 (古墳前期) | 109. 貝塚 (鎌倉～室町?) |
| 23. お塚 (様) 古墳 (古墳中期) | 53. 石井廃寺 (奈良?～室町) | 82. 備前国府関遺跡 | 110. 湊茶臼山古墳 (古墳前期) |
| 24. 津島東遺跡 (縄文～室町) | 54. 青陵古墳 (古墳前期) | 83. 北口遺跡 (弥生～室町) | 111. 湊荒神遺跡 (奈良～室町) |
| 25. 津島東3丁目第1地点 (弥生・古墳) | 55. 十二本木塚古墳 | 84. 備前国庁跡 (奈良～平安) | 112. 大塚山経塚 (鎌倉～室町) |
| 26. 一本松古墳 (古墳中期) | 56. 富山城跡 (室町～江戸) | 85. 備前国府推定地 (南国長) 遺跡 (弥生～鎌倉) | |
| 27. 不動堂古墳 | 57. 矢坂山西古墳群 (古墳後期) | 86. 南古市場遺跡 (奈良～平安) | |
| 28. 宿古墳群 (古墳前期・後期) | 58. 矢坂山山頂遺跡 (弥生) | 87. ハガ (高島小) 遺跡 (奈良～室町) | |
| 29. 妙見山城跡 (戦国) | 59. 矢坂山東古墳群 (古墳後期) | | |
| 30. 釜田遺跡 (弥生他) | | | |

図1 周辺遺跡分布図 (縮尺1/50,000、1/3,750,000)

古代国家完成期の政治状況を反映する国府や寺院関連遺跡については、旭川東岸における発掘調査成果から、備前国府の関連官衙と考えられるハガ遺跡²⁵、創建期が飛鳥時代にさかのぼり平城宮式瓦も出土した賞田廃寺²⁶、総柱建物や道路あるいは「上三宅」や「市」が書かれた墨書土器・「官」の刻印須恵器などが出土した百間川米田遺跡²⁷などがあげられる。また、旭川河口付近では、平城宮式瓦が確認されている網浜廃寺²⁸が知られる。その対岸では、8世紀の火葬遺構などが報告された新道遺跡²⁹、その西500mに8世紀後半の井戸から絵馬が出土した鹿田遺跡³⁰が続く。こうした状況の背景にみえてくる旭川河口を介した人々の交流が、本遺跡と関わりの深い鹿田庄成立の重要な要因となったと想定できる。

平安～鎌倉時代には、鹿田遺跡周辺は、地割り方向を手がかりにした歴史地理の研究³¹や発掘調査成果から摂関家殿下渡領の一つである鹿田庄の故地に比定されている。鹿田遺跡の詳細は後述するが、同地域を構成する新道遺跡では12世紀後半頃の井戸から「□□御庄久延弁」と書かれた木簡が出土し、また、南東600mの旭川河口岸に位置する二日市遺跡でも井戸などが確認されている³²。旭川東岸では、百間川遺跡群³³において該期の集落遺跡が知られている。こうした状況は、鎌倉時代における溝の大形化などにみる集落景観の変化を経て室町時代にも概ね継続する。

江戸時代には、岡山城や城下町の整備に伴う集落の再編、あるいはその後の海浜部での大規模な干拓によって、鹿田遺跡の状況は大きく変化する。海岸線は南へと後退し、鹿田遺跡周辺は屋敷地から耕地が広がる農村地帯へと変貌を遂げる。その後、1921（大正10）年に、岡山大学医学部および同附属病院の前身である岡山医学専門学校や岡山県立病院が建設された。これに伴って、遺跡は厚さ0.6～1mの造成土に覆われた。現在、都市開発の進行によって遺跡周辺は市街地となっている。

第2節 鹿田遺跡

1. 構内座標の設定

本センターでは、岡山大学鹿田地区構内において、周囲の市街地および構内建物の軸に合わせた構内座標を設定して調査および記録を行っている（図2）。この構内座標は、2002年度までは日本測地系による国土座標第V座標系に基づいて、南北・東西軸座標値（ $X = -149,800\text{m}$ 、 $Y = -37,400\text{m}$ ）を原点とし、南北軸をN-15°-Eに振ったものを使用していた。その後、2002年4月1日に改正された測量法の施行に伴い、2003年度以降に刊行する報告書からは座標値を世界測地系へ変更することとした³⁴。その結果、構内座標の原点は、 $X = -149,456.3718\text{m}$ 、 $Y = -37,646.7700\text{m}$ の数値にあたることとなった。

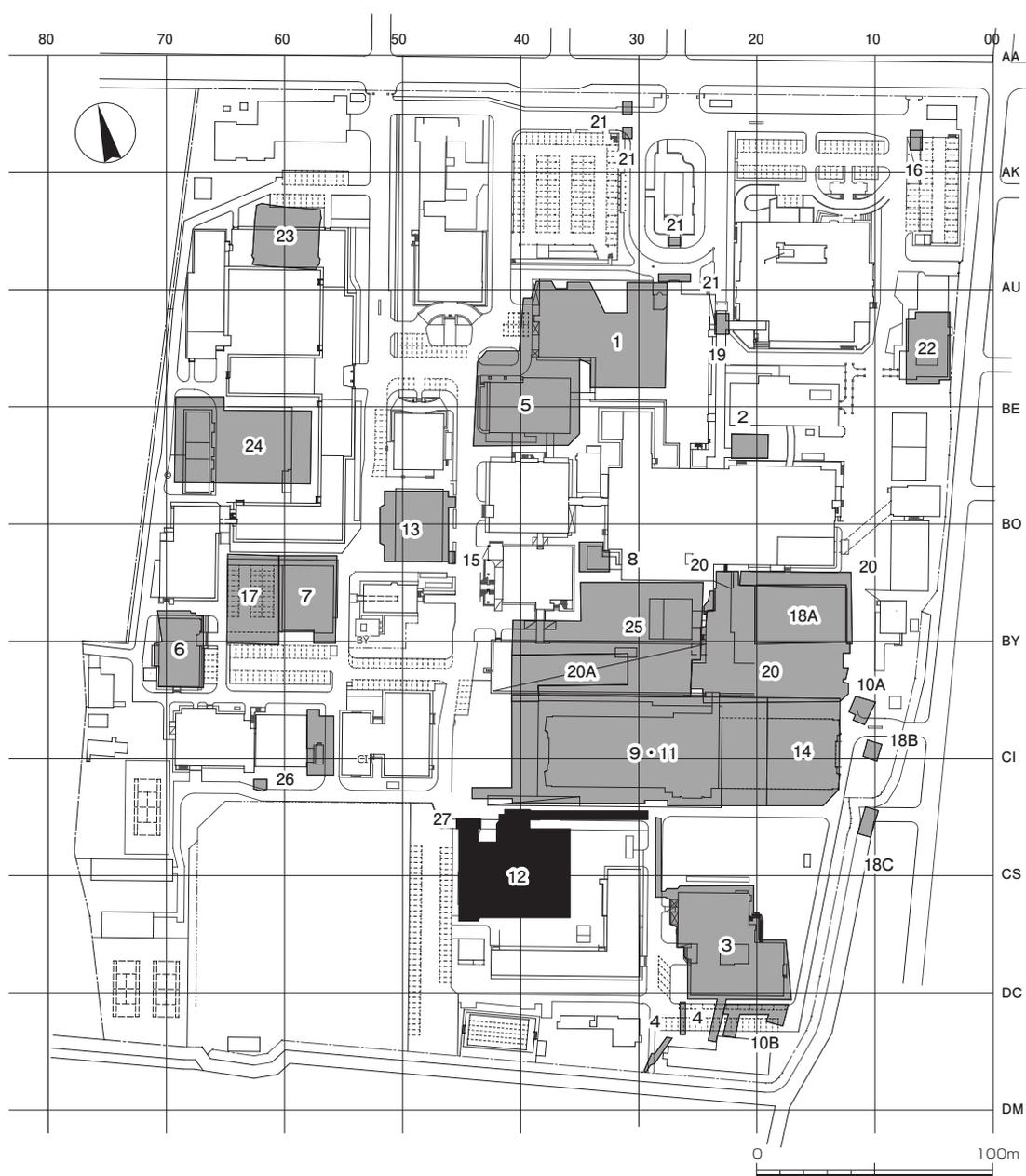
構内では座標原点から一辺5mの正方形の区割りを設定し、原点を通る東西ラインをAA、それより南へ5mごとの東西ラインをAB、AC、…AZ、BA、BB…、のごとく付番し、また原点を通る南北ラインを00、それより西へ5mごとの南北ラインを01、02、03…、と付番する。これらのラインによって形成される5m四方の区画名は、その北東コーナーで交わる2方向のライン名を組み合わせ、AA00区、AB01区、AC02区…、と呼称する。

2. 遺跡の概要

鹿田遺跡では、2019年度までに28次にわたる発掘調査が行われている。その成果から概略をまとめよう。

【地形環境】

本遺跡の立地環境は、前述したように旭川河口付近に形成された砂州状地形にあり、臨海性の高い集落遺跡と評価される。ただし、弥生時代後期～古墳時代初頭では、第9次・11次調査³⁵、第14次調査³⁶において水田域が、居住域（第1次・2次調査³⁷）の南側に確認されたことから、海岸線までは一定の距離があったことが想定され



- | | | |
|---------------------|-----------------------|------------------------|
| 1 第1次調査：外来診療棟 | 10 第10次調査：共同溝関連 | 19 第19次調査：渡り廊下 |
| 2 第2次調査：NMR-CT室 | 11 第11次調査：病棟 | 20 第20次調査：中央診療棟関連 |
| 3 第3次調査：医療短期大学部【校舎】 | 12 第12次調査：エネルギーセンター | 21 第21次調査：外来診療棟周辺他環境整備 |
| 4 第4次調査：医療短期大学部【配管】 | 13 第13次調査：総合教育研究棟 | 22 第22次調査：地域医療総合支援センター |
| 5 第5次調査：管理棟 | 14 第14次調査：病棟 | 23 第23次調査：JFホール |
| 6 第6次調査：アイソトープセンター | 15 第15次調査：総合教育研究棟【外構】 | 24 第24次調査：医歯薬融合棟 |
| 7 第7次調査：基礎研究棟 | 16 第16次調査：立体駐車場エレベーター | 25 第25次調査：中央診療棟（Ⅱ期） |
| 8 第8次調査：RI治療室 | 17 第17次調査：基礎研究棟 | 26 第26次調査：動物実験施設 |
| 9 第9次調査：病棟 | 18 第18次調査：中央診療棟 | 27 第27次調査：自家発電設備 |

※建物名称は調査次の呼称による。

図2 発掘調査地点と構内座標（縮尺1/3,000）

る。

ここで、本地点に集落が形成される弥生中期後葉以前の状況を整理しておこう。最も古い時期の遺物は、第1次調査で確認された縄文時代中期末～後期の縄文土器片である。続いて、弥生時代早期・前期の土器片があげられる⁴⁷⁾。数はそれぞれ1点程度で極めて少量である点は、該期の間活動の痕跡が希薄であったことを示すと同時に、各時期において多少なりとも陸地が存在したことも示唆している。近年実施されたボーリング調査成果では、縄文海進によって縄文早期には海面下となった鹿田遺跡の環境は、同前期～後期中葉には砂堤状の陸地となり、その後（同後期末）の海域環境を経て、弥生前期頃に、再度陸域へと変化していたことが指摘されている⁵⁷⁾。出土遺物の時期とはおおむね整合的である。最終段階の陸域はその遺物から弥生早期に遡ることが予想され、同域が河口付近に形成された高まりの中の一つであったことを示す。

また、地形面での大きな変化が弥生時代中期中頃～後期初めに起きたことがわかってきた。同時期に急速な土砂の堆積が微高地を形成したことが第23次調査で確認され⁵⁸⁾、また、中期中頃に河道が多量の土砂によって埋没している様子が第12次調査で見つかっている⁵⁹⁾。こうした沖積作用の進行が、本地点における微高地形成に大きな影響を与えたことは、その後の集落形成からも窺うことができる。

旭川西岸部のなかで、弥生時代中期後葉～古墳時代初頭における本地点周辺の地形は、北側に広がる遺跡分布域とは切り離され、海に突き出したような状態が復元される。

こうした状況は、本調査地点の北側に位置する調査地点の成果からも追認される。第16次調査⁴⁰⁾・第21次調査⁴¹⁾・第23次調査では、最も安定した微高地である第1次調査地点の北側に、深い谷地形あるいは河道が長期にわたって存在したことを示す。同地域が日常的に利用されるのは平安時代後半～鎌倉時代初頭以降である。本遺跡から北500m地点の大供中道遺跡では、鎌倉時代（13世紀）の耕作地の報告があり⁴²⁾、整合性をもつ結果を示す。一方、第1次調査地点の南側では、平安時代前期までは、第1次調査・第2次調査¹⁷⁾・第5次調査⁴³⁾地点付近はその周囲と1m程度の比高を有しており、岡山大学鹿田キャンパスの敷地全体に安定した土地環境が成立するのは、平安時代後半以降の土地開発を経てからである。

【集落】

本遺跡において集落が営まれた時期は、弥生時代中期後葉～後期前半～古墳時代初頭、飛鳥時代、奈良時代後期～平安時代前期、平安時代後期～戦国時代である。それぞれの間に多少の中断を挟むが、弥生時代中期後葉に集落が成立した後、戦国期末～江戸時代初めの城下町再編によって農村へと変貌するまで、連綿と集落が営まれていたといえそうである。

弥生時代中期後葉～古墳時代初頭： 中期後葉における居住域は、現状では、第1次調査地点（現在の岡山大学病院外来診療棟）に限定される。東西50～60m・南北50m程度の比較的小規模な範囲に居住域が復元される。その範囲は後期には、南側の第5次調査地点、南東側の第2次・第18次調査地点⁴⁴⁾、東側の第19次⁴⁵⁾・第22次調査⁴⁶⁾地点へと広がり、東西220m・南北100mの範囲を占める。また、その居住域の南側には水田域を形成する（第9次・11次・14次調査地点）。古墳時代初頭には、これらの居住域の中で東側（第22次調査地点）で遺構は姿を消し、西～南側の周縁部に新たな広がりを見せる。西側の第7次調査⁴⁷⁾・17次調査⁴⁸⁾地点では竪穴住居や井戸が形成される。一方、南側の第12次調査・13次調査⁴⁹⁾・20次調査⁵⁰⁾各地点では土器溜まりの形成が顕著にみられるほか、西側の第24次調査⁵¹⁾地点では土器棺の存在が目される。

居住域における遺構の構成は、竪穴住居・掘立柱建物・井戸・土坑・土器棺・土器溜まりが中心的構造物をなす。竪穴住居3～5棟前後で構成された可能性が高く、ほぼ一単位の集落といえそうである。こうした遺構群には、後期後半以降に様々な変化が生じる。後期末～古墳時代初頭には、柱穴を有さない小規模な住居や井戸の数が増加する。一方、土坑はその数を大幅に減じ、それに入れ替わるように土器溜まりが増加する⁵⁵⁾⁵⁶⁾。出土遺物の構成にも、甕の増加などに新たな動きが認められる。後期後葉以降における社会変化の一端を示す動きとして評

価できそうである。また、土坑には製塩土器や炭化物を多量に含むもののほかに、第17次調査地点の資料なども、集落内における手工業生産の実態を探る手掛かりとなっている。

また、本遺跡では、海との関連を窺わせる製塩土器や土錘・石錘が多く出土するほか、弥生後期には四国地域との関係を示す甕（第1次調査）、古墳時代には畿内地域・山陰地域・阿波地域などからの搬入土器の存在が目される（第12次調査・第24次調査）。このように、本遺跡は旭川西岸における集落の中で、海浜集落として一定の役割をもつ場所であったと考えられる。

古代（飛鳥時代）：古墳時代前期に集落は姿を消すが、7世紀前半期には、第1次・第2次調査地点に小規模な集落が出現する。その広がり、近年の調査から、同地点の西側（第23次調査地点）にも認められている。その後、一時期の中断を経た後、奈良時代後半～平安時代前半の居住域に引き継がれる。

古代（奈良時代後期～平安時代前期）：第1次・2次・5次調査地点を中心に、庇付き掘立柱建物を含む建物群や大形の削り貫き井戸枠を備えた井戸で構成される居住域が形成される。8世紀後半～10世紀初めの時期であるが、そうした遺構の分布範囲は限定的である。一方、同域から約250m南に位置する第4次調査⁵¹地点では、東西方向に流路を取る河道や橋脚、杭による護岸が確認されている。径約30cm前後の大形杭列は、堅固な基礎構造を持つ橋の構造を示しており、人通りの多い交通の要所に構築されていたと判断される。これは、鹿田遺跡が水陸交通の要所として機能していたことを端的に示す。

遺物では、木簡・墨書土器・硯などの文字関連資料のほか、黒色土器・丹塗り土器・緑釉の唾壺や石帯など特徴的な遺物を含む。硯には蹄脚硯が含まれる。また、第24次調査地点の調査では、井戸から2枚の絵馬が重なって出土した。本時期に属する5基の井戸では、削り貫きの井戸枠が設置され、横櫛・刀子・曲物・斎串・モモがセット関係をもって出土する。以上の遺構や遺物の状況は、本遺跡が何らかの管理地的な役目を有し、都とのつながりの強い集落であったことをうかがわせる。

中世前半（平安時代後期～鎌倉時代）：10世紀～11世紀初めには、集落は岡山大学鹿田キャンパスから姿を消す。一方、本キャンパスの西側に位置する鹿田遺跡（県立岡山病院の敷地）に、同時期の遺構が形成される⁵²。本敷地で集落が再開するのは11世紀代であり、両地点での集落の移動が予想される。新たに形成された11～12世紀の集落構造は以前とは全く異なる村落景観が出現する。現在に残る地割り方向（北が15°東に傾斜）に沿った溝で敷地全体が区切られており、1町を単位とした基盤目状の地割りに合わせて屋敷地が配されている。その地割りは12世紀後葉～13世紀初頭に再編され、新たに形成された大形の区画溝は屋敷地を閉鎖的な空間へと変化させる⁵³。

出土遺物では、輸入陶磁器・石鍋・砥石あるいは瓦器・東播系のすり鉢などが、遠隔地あるいは近隣地域から持ち込まれており、傀儡回しの来訪を予想させる鎌倉時代末頃の猿形木製品（第7次調査）と合わせて、人や物資の盛んな流通を裏付ける遺物として注目される。こうした遺物から、海運・水運の結節点に形成された流通拠点としての役割を担う集落の一端が垣間見える。また、瓦や呪符木簡、銅鏡（第6次調査）⁵⁴からは、宗教的建物の存在も浮かび上がる。その他に、第25次調査⁵⁴では烏帽子を被った状態で埋葬された墓などから、名主層の存在も想定される。

中世後半（室町時代～戦国時代）：鎌倉時代後葉（13世紀末～14世紀前葉）には、次の時代へ向けて屋敷地の再編が行われる。一部の溝は廃絶し、区画溝は主要な溝に集約される。その結果、溝で区画された屋敷地の面積は拡大するケースが多い。また屋敷地の配置は、第1次調査地点を中心とする北側域から、第9次・11次・14次調査地点が位置する南側において東西方向に並ぶ傾向を強める。また、第20次調査で出土した猿をモチーフとする水滴などは有力武家の存在を窺わせる^(50-a)。

近世（江戸時代）：屋敷地から耕作地へと、遺跡の様相は大きく変化する。各調査地点において畦畔や野壺などが認められる。時代背景を考えると、江戸時代開始前後に行われた岡山城下町の再編による影響が想定される。

ただし、18世紀には、第18次調査B地点に船着き場、第18次調査A地点周辺に屋敷地があった可能性があり⁴⁴⁾、近代に続く大庄屋の存在を想定させる資料が増えている。

【藤原摂関家殿下渡り領「鹿田庄」の成立との関係】

本遺跡は、「鹿田庄」の比定地として評価されている。同庄の成立時期については不明な点もあるが、『興福寺縁起』によれば、弘仁4(817)年に興福寺南円堂で行われた法華会の料米72石を「鹿田地子」で当てたとされており⁵⁹⁾、平安時代初期には興福寺と強い関係を有す藤原摂関家の影響が当地に及んでいたことは十分に予想される。同時期の建物や井戸は、第1次・2次・5次発掘調査地点で確認された建物群や大形井戸(およそ8世紀後半～9世紀代初め)のみであったが、近年、集落の西端に位置する第24次調査地点で同時期の井戸が加わった。前述したように、その内部からは2枚の絵馬が重なって出土している。こうした資料は鹿田庄成立期前後における本遺跡の性格を考える上で重要な手がかりになろう。

本章は下記既報告の文章をもとに、現在までの調査研究で新たに認識された事項を大幅に加筆し、改変したものである。

高田貫太2007「第1章 歴史的・地理的環境」『鹿田遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23冊

註

- (1) 鎌木義昌 1962「第一編 原始時代」『岡山市史(古代編)』
- (2) 富岡直人 1998『朝寝鼻貝塚発掘調査概報』加計学園埋蔵文化財調査室発掘調査報告書2
- (3) a 山本悦世編 1992『津島岡大遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第5冊
b 阿部芳郎編 1994『津島岡大遺跡4』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第7冊
c 岩崎志保編 2005『津島岡大遺跡16』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第21冊
- (4) a 二宮治夫編 1985『百間川沢田遺跡2 百間川長谷遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59
b 平井 勝編 1993『百間川沢田遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84
- (5) 山本悦世編 2004『津島岡大遺跡14』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第19冊
- (6) a 津島遺跡調査団 1969『昭和44年岡山県津島遺跡調査概報』
b 岡山県教育委員会 1970『岡山県津島遺跡調査概報』
c 島崎 東ほか 1999『津島遺跡1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告137
d 平井 勝 2000『津島遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告151
e 島崎 東ほか 2003『津島遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告173
f 岡本泰典ほか 2004『津島遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告181
- (7) a 岡田 博編 1998『北方下沼遺跡 北方横田遺跡 北方中溝遺跡 北方地蔵遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告126
b 高田恭一郎編 2000『北方地蔵遺跡2 北方藪ノ内遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告149
- (8) a 宇垣匡雅編 1999『百間川原尾鳥遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88
b 平井 勝編 1995『百間川原尾鳥遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97
- (9) a 高畑知功 1988『津島江道遺跡』『岡山県埋蔵文化財報告』18
b 草原孝典 1999『津島江道(岡北中)遺跡』『岡山市埋蔵文化財調査の概要 1997(平成9)年度』
- (10) a 柳瀬昭彦 1988『中溝遺跡』『日本における稲作農耕の起源と展開-資料集-』日本考古学協会静岡大会実行委員会
b 柳瀬昭彦 1988『南方釜田遺跡』『日本における稲作農耕の起源と展開-資料集-』日本考古学協会静岡大会実行委員会
- (11) a 岡山市遺跡調査団 1971『南方遺跡発掘調査概報』
b 岡山市遺跡調査団 1981『南方(国立病院)遺跡発掘調査概報』
c 柳瀬昭彦・岡本寛久 1981『南方遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告40
d 安川 満編 2016『南方遺跡』岡山市教育委員会
- (12) a 高橋 護・正岡睦夫ほか 1972『雄町遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』1
b 草原孝典 2017『雄町遺跡』岡山市教育委員会
- (13) a 江見正巳ほか 1980『旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査I』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39
b 正岡睦夫編 1984『百間川原尾鳥遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56
c 柳瀬昭彦編 1996『百間川原尾鳥遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106
d 高田恭一郎編 2008『百間川原尾鳥遺跡7 百間川二の荒手遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告215
- (14) 内藤善史編 1996『絵図遺跡 南方遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告110
- (15) a 中野雅美 1984『上伊福(ノートルダム清心女子大学構内)遺跡』『岡山県埋蔵文化財報告』14
b 中野雅美・根木 修 1986『上伊福九坪遺跡』『岡山県史 考古資料』

- (16) a 杉山一雄編 1998『伊福定国前遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告125
 b 金田善敬編 2005『伊福定国前遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告188
 c 亀山行雄編 2010『伊福定国前遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告224
- (17) 吉留秀敏・山本悦世編 1988『鹿田遺跡Ⅰ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊
- (18) 出宮徳尚 1986「天瀬遺跡」『岡山県史』考古資料
- (19) 高畑知功 1982『百間川兼基遺跡1・百間川今谷遺跡1』岡山県埋蔵文化財調査報告51
- (20) 宇垣匡雅 1990「網浜茶臼山古墳・操山109号墳の測量調査－吉備の前期古墳Ⅲ－」『古代吉備』第12集
- (21) 松木武彦 1993「岡山平野における弥生～古墳時代の地域集団」『鹿田遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊
- (22) 神谷正義・安川 満 2007『神宮寺山古墳 網浜茶臼山古墳』
- (23) a 西谷真治・鎌木義昌 1959『金蔵山古墳』岡山市教育委員会
 b 宇垣匡雅 2008『金蔵山古墳』岡山市教育委員会
 c 安川 満・寒川史也 2019『金蔵山古墳』岡山市教育委員会
- (24) a 近藤義郎 1986「湊茶臼山古墳」『岡山県史』考古資料編
 b 安川 満 2013『湊茶臼山古墳』岡山市教育委員会
- (25) 草原孝典 2004『ハガ遺跡』岡山市教育委員会
- (26) 高橋伸二 2005『史跡賞田廃寺跡』岡山市教育委員会
- (27) 岡山県教育委員会 1982『百間川当麻遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告52
- (28) 中野雅美 1977「吉備における平城宮式瓦について」『川入・上東』岡山県埋蔵文化財報告16
- (29) 草原孝典 2002『新道遺跡』岡山市教育委員会
- (30) 南健太郎編 2018『鹿田遺跡11』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第33冊
- (31) a 山本悦世 2007「中世の集落構造と推移－鹿田遺跡の場合－」『鹿田遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23冊
 b 山本悦世 2015「鹿田遺跡の土地区画と岡山平野の条理関連遺構」『条里制・古代都市研究』30 条里制・古代都市研究会
- (32) 出宮徳尚 1985「岡山県二日市遺跡」『日本考古学年報』3
- (33) 柳瀬昭彦編 1996『百間川原尾島遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106 ほか
- (34) 光本 順 2004「日本測地系から世界測地系への移行に伴う構内座標の変更について」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2002』
- (35) 山本悦世編 2017『鹿田遺跡10』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第32冊
- (36) 岩崎志保編 2014『鹿田遺跡8』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第29冊
- (37) 山本悦世ほか 2019「岡山平野における環境復元へのアプローチ」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2017』
- (38) 南健太郎編 2016『鹿田遺跡9』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第31冊
- (39) 山本悦世 2001「鹿田遺跡第12次調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』18
- (40) 高田貫太 2006「鹿田遺跡第16次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2004』
- (41) 光本 順 2012「鹿田遺跡第21次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2010』
- (42) 河田健司 2000『大供中道遺跡発掘調査概報』岡山市教育委員会
- (43) 松木武彦・山本悦世 1993『鹿田遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊
- (44) a 山本悦世 2008「鹿田遺跡第18次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2007』
 b 光本 順ほか 2013「鹿田遺跡第18次調査B/C地点」『鹿田遺跡7』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第28冊
- (45) 野崎貴博 2010「鹿田遺跡第19次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2008』
- (46) 岩崎志保 2012「鹿田遺跡第22次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2011』
- (47) 山本悦世編 2007『鹿田遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23冊
- (48) 山本悦世 2008「鹿田遺跡第17次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2006』
- (49) 光本 順編 2010『鹿田遺跡6』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第26冊
- (50) a 山本悦世 2011「鹿田遺跡第20次発掘調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2009』
 b 山口雄治ほか 2018「鹿田遺跡第20次A地点」『鹿田遺跡12』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第34冊
- (51) 山本悦世編 1990『鹿田遺跡Ⅱ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第4冊
- (52) 河合 忍 2007「総括」『鹿田遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告210
- (53) 松木武彦・山本悦世 1997『鹿田遺跡4』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第11冊
- (54) 山口雄治ほか 2018「鹿田遺跡第25次調査」『鹿田遺跡12』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第34冊
- (55) 鈴木景二 2002「備前国鹿田庄・荒野史料と絵図」『新道遺跡』岡山市教育委員会